

《動向・紹介》

こざき亜衣『セシルの女王』（小学館）

新田 さな子

近年、歴史を扱った漫画やアニメ、ゲームなど、いわゆるサブ・カルチャーの様々なコンテンツが、歴史への関心への重要な入口の一つとなっている。その多様性は、洋の東西を問わない題材や、ファンタジーから完全なフィクション、史実に基づいたものまで、「歴史もの」と呼ばれるジャンルの幅広さに現れている。

それらの作品の中でも、史実に基づき、専門家を時代考証に招いたものは、歴史学の世界でも注目されるべきものである。題材となっている時代や、主要人物の認知度を高めることに貢献できるとともに、研究成果を一般社会へ還元できる機会でもある。しかし、時代考証が実際どのように行われているのか、もっと言えば、史実をもとにしたフィクションが、どのように作られているのかは、広く知られていることではない。社会とアカデミアの接続や、アウトリーチが重視される昨今、人々が歴史に触れるきっかけを知り、そこにどのように研究者がアプローチしていけるかを共有することは、価値のあることだと考える。

このような問題関心のもと、2023年3月3日（金）、[歴史家ワークショップ](#)の主催で、YouTube 配信イベント、[『セシルの女王』のウラガワ！](#)を開催した。『セシルの女王』は、小学館ビッグコミックオリジナルで連載中の漫画で、イベントでは、作者で漫画家のこざき亜衣氏、監修の指昭博氏（神戸市外国語大学名誉教授）、編集担当の生川遥氏（小学館）にご登壇いただき、筆者がファシリテーションを務め、作品の制作背景に迫る座談会を行った。本稿では、このイベントを踏まえて、『セシルの女王』の制作背景や、時代考証の仕事を明らかにしつつ、作品を紹介していく。なお、本稿の最後には、イベントの座談会部分と、質疑応答部分の簡単な書き起こしをつけているので、そちらも併せてご覧いただきたい。

本作品は、16世紀のイングランド、テューダー朝期に、ジェントリの息子として生まれたウィリアム・セシル（1520～1598年）が主人公である。セシルは、ケンブリッジで学んだ後、エドワード6世（在位1547～1553年）の治世に宮廷の重要メンバーとなる。その後、カトリックのメアリ1世（在位1553～1558年）時代には、セシルは、自身がプロテスタントであることを理由に宮廷から遠ざかるが、メアリとは友好関係を保った。エリザベス1世（在位1558～1603年）治世では、国務長官となり、イングランドの政治に欠かせない人物となる。『セシルの女王』は、一介のジェントリの息子にすぎないウィリアムが、高圧的なヘンリ8世（在位1509～1547年）や、命がけで宮廷を生き抜こうとしたアン・ブーリン、新時代の幕を開けたヘンリの側近トマス・クロムウェルら、テューダー朝を彩る面々から影響を受けながら、激動の時代を駆け抜ける物語である。

本作の特徴の一つは、綿密な取材、調査であると私は考える。服飾の作りや、当時の生活、背景としての政治・宗教・外交の状況などは、専門家の検証にも十分耐えうるものでありな

がら、ストーリーの邪魔をすることなく、むしろリアリティを高め、歴史を知らない読者が、物語に没入することに大きな役割を果たしている。作者のこざき氏と編集担当の生川氏は、歴史に関しては全くの素人だというのが、その勉強量はかなりのものであることがうかがえる。イベントでは、生川氏が自ら調べて作成したスプレッドシートや、指氏から受け取った資料を管理しているドキュメント資料、また、指氏自作の資料なども共有していただいた。

漫画の制作過程は、まず、こざき氏と生川氏がストーリーの流れについて打ち合わせをしたあと、こざき氏がネームを作成し、その過程で生じた疑問や、確認したい点を枠外にメモし、ネームを指氏に送る¹。つぎに指氏がそのメモに答えるため、文字資料や、図版資料、時には自らがスケッチするなどして資料を作り、お二人に返す、という工程になっているという。お話を聞いていて印象的だったのは、指氏が考え付かなかったような疑問を、こざき氏と生川氏から投げかけられ、それを調べることで監修者である指氏にとっても新たな発見がある、ということだ。監修と言うと、専門家が、持っている知識を一方向的に助言する、という形を思い浮かべる方もいるかもしれないが、長年第一線で活躍してきた研究者でも、漫画作品の監修の立場となることで、新たな視点を得られるという、互恵的な関係がそこにはあるのだ。

本作のもう一つの魅力は、登場人物たちが生き生きしていること、その結果として、500年前の人々や出来事を身近に感じられることである。この点は、キャラクターの感情や、なぜ今そのように考えているのか、という点を掘り下げ、その感情さえわかってもらえたい、という制作陣のスタンスに大きな理由があるだろう。歴史の細事や、カトリックとプロテスタントの対立といったことがわからなくても、ウィリアムがなぜ、どう生きるのかが問題なのであり、立ち向かっている課題や時代が違うだけで、一人一人の感情は現代と共通しているということが伝われば、読者に楽しんでもらえると考えているという。

また、指氏の時代考証の塩梅も重要である。公文書に記録されている事柄は変えない、また、その時代には存在しないものがあれば指摘する、といった対応の一方、記録がない事柄に関しては、屁理屈でも説明がつく事柄であれば訂正はせず、むしろその屁理屈や折衷案を考える、という方針で考証を行っているという。専門家として間違いを指摘するだけでなく、作者のネームを活かして、創作作品として魅力的になるよう、史実からフィクションへの橋渡しをするために考える、という監修ならではの仕事である。これには、指氏自身も漫画が好きであることや、以前にも漫画を監修した経験があることなども関係するだろう²。このような方針のおかげで、のびのび漫画を描けていると、こざき氏と生川氏は言う。

本作品の特筆すべき最後の点は、指氏が担当する単行本の巻末のコラムである。第2巻で

¹ ネームとは、下絵の前の設計図のようなもの。ストーリーの流れ、コマ割り、セリフが入っている。

² 指氏は、『7人のシェイクスピア』を監修していた。『7人のシェイクスピア』は小学館『ビッグコミックスピリッツ』で2009～2011年に発表された漫画。全6巻。生川氏の異動前の担当雑誌であるスピリッツで連載されており、生川氏の先輩が担当していた。その後、講談社『週刊ヤングマガジン』に移籍し、続編が掲載されている。続編は既刊13巻。

は宗教改革、第3巻ではヘンリ8世と彼の王妃たちについて、指氏がコラムを書いている。コラムの内容は生川氏が決めている。一面的な描き方にしたくないものの、物語を進めるために、本編では描けなかった部分や、省略せざるを得なかった部分がどうしても出てくる。そのような部分の補足を、専門家の目線から書いてもらうことで、物語に奥行きを与えたり、読者が改めて本編を読むときの新しい視点になったりすることを望んでいるという。この狙いは成功しているように思う。歴史を知らない読者には、多面的な人物像や世界観を提供し、知っている読者は、細かい点まで言及されていることに満足感を抱くこともあれば、確かな調査の上に物語が展開されていることに対して、信頼感を持つこともできるだろう。

以上のように、『セシルの女王』は、綿密な調査と時代考証の上で、激動の時代に翻弄されながらも、生きるためにもがく、血肉の通った人々の物語を展開する。テューダー朝に詳しい人はもちろん、そうでない人も、むしろ歴史を知らないからこそ、先の展開に手に汗を握りながら、人々の生き様や人間模様を楽しめるだろう。テューダー朝を専門にしている私としては、この作品からテューダー朝に興味を持ち、研究の道に進む読者が出てくることをひそかに期待しつつ、一読者として、これからのウィリアムの成長、そして『セシルの女王』のイングランドの行く末を、とても楽しみにしている。



左から、『セシルの女王』単行本1、2、3巻。

イベント書き起こし

K：こざき亜衣氏、S：指昭博氏、O：生川遥氏、N：新田さな子、Q：質問

登壇者の自己紹介

K：『セシルの女王』を描いている、こざき亜衣です。前に連載していた漫画が、なぎなたの女子高生のスポ根漫画だったので、全く違う毛色のものを始めてしまった、という感じです

3. 右も左もわからない状態で歴史漫画を始めましたが、とても楽しんで描いています。

O: 小学館の生川です。こざきさんの担当編集を10年ほどしています。前作『あさひなぐ』というなぎなた漫画を、(小学館ビッグコミック)スピリッツで連載していただき、その時から担当しています。その後、オリジナルに異動し、『セシルの女王』という作品を始め、今1年半くらい経過しました。単行本は3巻まで発売中で、4巻は5月末に発売予定です。
S: 指です。この企画をお聞きになっている方の中では、一番専門に近いかと思います。テューダー史を専門にしており、歴史の監修を担当しています。

座談会

1. 漫画を描くまで

Q: なぜ、ウィリアム・セシルを主人公にしようと思ったのですか？そもそもテューダー朝に関心をもったのは何故ですか？

K: 興味を持った人がたまたまテューダー朝の人でした。最初は、セシルではなく、エリザベス1世を主人公にしようと思っていました。ですが、君主という存在は感情移入がしづらく、身近すぎる存在になってもいけないため、主人公として描きづらいんですね。調べていくうちに、読者に近い目線でエリザベスを見ることができる、セシルを見つけました。恋愛関係ではないバディものを描いてみたかったのもあります。現代的なテーマにもなるし、セシルとエリザベスのダブル主人公にすれば、新しい漫画になるのではと思いました。

O: エリザベスを描こうとすると、アン・ブーリンから描かざるを得ません。アン時代から(歴史を)見ているキャラクターとして、ウィリアムはエリザベスより13歳上なので、ちょうどよいなと思いました。実際には、アンとウィリアムは出会っていないと思いますが、そこからドラマを見つめてくれる人として、年齢設定が完璧です。ウィリアムを見つけられてよかったです。

N: セシルを見て行けば、テューダー朝の後半をほとんど見ることができますよね。

K: 私たちは逆に、セシルを取り上げるということは、そういうことなのだということを知らなかったです(笑)。

Q: どのような経緯で指先生に監修を依頼することになったのですか？

O: 完全にラッキーパンチでした(笑)。歴史ものに限らず、信頼できる監修の先生を見つけられるかどうかは、取材が必要な漫画にとっては大きな要素を占めてきます。こざきさんも私も、どなたにお願いすべきか全くわからなかったのですが、いろいろな書籍を読んでいくなかで、プロフィールなど様々な要素を考慮しました。漫画の監修は、フィクションの部分を理解してくれることが重要になります。『ヘンリ8世の迷宮』を読み、編者の指先生に連絡しようということになり、当時指先生が学長をしていた、神戸市外国語大学のホームページ

³ こざき亜衣『あさひなぐ』。小学館ビッグコミックスピリッツにて、2011年～2020年まで連載された漫画。全34巻。実写映画化や舞台化も行われた作品。

ジに載っていたメールアドレスに、ダメもとでメールしました⁴。その後、奇跡的にお返事が来て、二つ返事でOKを頂きました。

K：最初に正解を引きましたね。

Q：指先生は監修依頼が来たときはどのように思いましたか？セシルが主人公になるということについてはどう思いましたか？

S：生川さんからメールが来たのは退職の2週間前でした。二つ返事どころか、一つ返事で受けたと思います（笑）。「セシルを主人公にするとは、ついに日本の漫画もここまで来たか」と驚きました。それは協力しないわけにはいかない、とも思いました。新田さんが言ったように、セシルを見て行けば、この時代を通して見られますよね。加えて、フィクションにあまり登場していないので、色がついていません。読者が先入観なく読めるので、良い選択だと、一読者として思いました。

Q：監修者として名前をだすことにハードルは感じますか？

S：ハードルはありません。ただ、『セシルの女王』では、本誌の連載ページの欄外に名前が載っていますが、初回が来るまで、そんなに大々的に出るとは知りませんでした（笑）⁵。以前、日本史の先生とも、監修の話で盛り上がりました。監修している人は、楽しんでやっているといますよ。ただ、私より年上の人のなかには、嫌がる人もいたという話は聞いています。歴史家の沽券にかかわると言う人もいたようです。私自身は、小学館の本で大きくなった人間なので、小学館から声をかけてもらえただけで舞い上がりました（笑）。

2. 漫画を描いていくなかで

Q：どのような流れで『セシルの女王』を描いているのですか？

O：最近流れが固まってきました。この単行本の巻には、年表のこの時期を入れたい、ということ事前にイメージします。その時期を描くために必要な人物や出来事を調べ、ワードなどで資料としてまとめ、打ち合わせでこざきさんと共有します。それをもとに、1冊の単行本の中でポイントになる箇所を確認し、具体的に各話を練っていきます。こざきさんは漫画の作り方がおもしろい作家さんで、『セシル』は1話全24ページですが、どのような流れで、どのようなセリフがあって、というところまでを打ち合わせで一緒に決めます。基本的には、こざきさんが描くのを待って、数ページ進むごとにを見せてもらって、前半もう少し詰めましょうか、などの意見交換をします。24ページ埋まるころまで打ち合わせが終わったら、そのあとはこざきさんがネームを描きます。ネームができたら、指先生にお送りします。描いていくなかで、こざきさんが疑問に思ったところを指先生に答えてもらったり、歴史的に明らかにおかしいところを修正してもらったりします。指先生の確認後、作画に入ります。校了

⁴ 指昭博編『ヘンリ8世の迷宮』昭和堂、2012年。

⁵ 前回の監修の時には、単行本の巻末には名前が載っていたが、連載本誌では名前が出ていなかった。

前のものをもう一度指先生にチェックしてもらい、1話が完成です。

Q：どのような資料を参照しましたか？

N：事前に頂いていた、スプレッドシートとグーグルドキュメントを共有しますね。まずはスプレッドシートについて、お聞きします⁶。これを作成するために、どのような資料を参照しましたか？

O：イギリスで出版されたセシルの伝記を、1冊丸々友人に翻訳してもらって、それを使って作りました。スプレッドシートなので、いつでも、どこからでもアクセスできます。

K：どの段階で誰が何歳か、わからなくなってしまうことがよくあるのですが、これが結構大事なんです。

O：ドキュメントは、指先生にお聞きして送ってもらった回答を、メールだけに置いておくと埋もれてしまうので、項目に分けてタブごとにまとめています。指先生から頂いた文章や画像資料は、すべてコピーしてここに張り付けています⁷。これもグーグルドキュメントなので、私とこざきさんは、いつでもどこからでもアクセスできます。

K：私が早い段階で（情報量の多さに）パニックになってしまいました（笑）。一か所に投げ入れる形でいいので、まとめておいてほしいと生川さんをお願いして、まとめてもらいました。

O：連載が終わるころには、大きなデータベースになると思います。これとは別に、図版資料だけまとめたデータベースもあって、取り出しやすいように整理しています。

Q：史実（史料、根拠）とフィクションのバランスについて教えてください。

N：綿密な調査の上に、漫画が作られていることが分かりました。ですが、物語として面白くしていくために、また、史料と史料の隙間を埋めるために、脚色、演出、創作が必要になってくると思います。どのようなバランスで描いていますか？

K：そこは素人の強みです。相当間違っていたら指先生が指摘してくれるだろう、とっていますし、研究者じゃないからこそ、できる飛躍があると思っています。おもしろさを絶対的に優先し、大胆に出してから、指先生に調整してもらおう感じです。

O：指先生は、その辺に関して本当に理解があるので、ありがたいです。

K：出来事の順番を変えないようにはしています。年表的なことはずらさないとか、死んでいる人を生きているようには扱わないとか。

O：ウィリアムがケンブリッジに入学した年などは、ふわっとさせています（笑）。反対に、公文書に残っているようなものは動かさないようにしています。

⁶ 年表。年月日と、国内での出来事、セシル、エリザベス、メアリ、エドワードのそれぞれの年号時点での年齢、国外情勢、その他備考がまとめられている。

⁷ 一例として、ウェストミンスター宮殿についてのタブを見せていただいた。ぜひ動画を参照していただきたい。

S:『セシルの女王』のウィリアムの入学年は、ウィキペディアに載っている年とは違います。この時代は、入学という制度そのものがなかったのので、定説の年号よりも早く大学に行っても間違いにはなりません（笑）。

K: こういう点は、むしろ指先生が柔軟に言い訳を考えてくれますね（笑）。

Q: 人物造形について教えてください。

N: まずセシルについてお聞きします。私自身が史料から受けるイメージでは、晩年は老家老として重々しい感じですが、若いころは、政治的なトラブルや争いに巻き込まれ、いろいろな陣営につきながら、サバイブしていた、というものです。本作では、アン・ブーリンとの出会いをきっかけに、かなり早い段階から、エリザベスの忠臣になる未来が見えます。私にはこの発想がなかったので、どこから着想を得たのかお聞きしたいです。

K: 調べていくうちに自然と思いつきました。キャラクター造形においては、この人はこういう性格だった、など書いてある資料も出てきますが、あまり気にしないようにしました。やってきたことだけを見て、外堀から人物像を作っていました。特に、エリザベスがセシルを国務長官に任命したときの言葉を見る限りでは、昨日や今日の関係ではないなと思いました。そこから調べていくと、ケンブリッジの関係者などとのつながりから、エリザベスが幼いころから、セシルがそばにいてもおかしくないぞと。また、セシルが自分の信仰を死ぬまで明かさなかったところもいいと思います。風見鶏と言えるかもしれませんが、自分の大事なものを人に明かさないというのは、この時代を生きる上ではとても賢いことだし、本当に大事にしているからこそだと、私は受け取りました。そこから主人公ができました。

N: 受け取り方は人それぞれということですね。アン・ブーリンについてもお聞きしたいです。アンは、時代によって描かれ方が変わる人物です。「悪女」の代名詞のように描かれることもあれば、暴力的なヘンリ 8 世の被害者として描かれることもあって、その時々女性観が反映される傾向にあります⁸。今回も新しいアンの描き方だと感じました。どのように人物造形をされましたか？

K: アンは、悪女として描かれることが多いですが、やったことや、たどってきた道を見ると、悪い人間というよりは、背水の陣で、野心を持って勝負に出た女に見えました。勝者が歴史を描いていく中で、アンは負けた側の人間なので、本当はどうだったのか、こうだったのではないかと、という部分を私の中で膨らませました。ですが、アンがこんなに読者に受け入れられたのは意外でした。キャサリン・オブ・アラゴンを追い出したのは事実なので、受け入れてもらえるのか心配でした。ただ、アンがリスクを背負っていたということを描けたらと思っていました。それも、私が現代の女性観を無意識のうちに反映しているのだと思います。

⁸ Stephanie Russo, *The Afterlife of Anne Boleyn* (London: Palgrave Macmillan, 2020).

Q：既存の作品との距離は意識しましたか？

N：以前、Twitter スペースでの配信で、『ブーリン家の姉妹』や『エリザベス』といった、テューダー朝を舞台にした他の作品を見たとおっしゃっていましたが、それらの作品から影響を受けたり、逆に差別化を意識したりはしましたか⁹？

K：あまり意識していません。おもしろいとは思いますが、自分で作る時は、まっさらな状態で作っています。他には、『チューダー王朝弁護士シャードレイク』は読みました¹⁰。クロムウェルが出てきますよね。『TUDORS』はまだ見ていません¹¹。カロリーが高そうなので、体力があるときに見ようと思います（笑）。

O：『ヘンリー八世の私生活』は、4番目の王妃アンの描かれ方がおもしろかったです¹²。他にも、コメディタッチなトーンや、観衆が食事をしながら処刑を見ているシーンなど、『セシルの女王』とはまた異なりますが、一つの距離の取り方としておもしろいと思いました。ですが、影響はあまりないです。『わが命つきるとも』も、指先生に教えてもらって見ました¹³。トマス・モアの話なので、『セシルの女王』にはあまり影響はありませんが、裁判シーンなどは参考にしています。人物造形には影響していませんが、作画資料という感じです。

Q：描いていくなかで、どのような疑問がでてきましたか？

K：逐一いろいろ疑問は出てきます。最初思い描いていた展開があっても、指先生に投げると、「それはあり得ない」と返ってくることもあります。

S：そんなに否定してないですよ（笑）。

O：例えば狩りのシーンを描いている時に、馬に乗って弓を使うと思っていたのですが、指先生から、当時は弓は使わず、犬が追いかけると指摘されました。

K：ネットで画像を検索していると、ヘンリがボウガンを持っている絵なども出てきます。簡単に信じてはいけないなと思いました。狩りのシーンのために、猟犬について調べたりしても、知識の幅が広がりました。指摘をもらうと新しいアイデアが生まれたりもします。

O：犬も交配を繰り返しているのです、16世紀にいた犬はどんな犬かとか、聖堂の飾りつけの画像が4パターン残っているけれど、当時のものはどれか、などの質問を聞いています。なんでも答えてくれるので、指先生は実際に見て来たのかなと思います（笑）。

K：結婚式の参加人数や規模、参列者の顔ぶれなど、全部答えてくれます。指先生は、本当はテューダー朝の人間で、タイムスリップしてきたのだと思っています（笑）。描いている

⁹ 『ブーリン家の姉妹（原題：Other Boleyn Girl）』2008年公開の映画。『エリザベス（原題：Elizabeth）』1998年公開の映画。『エリザベス：ゴールデン・エイジ（原題：Elizabeth: The Golden Age）』2007年公開の映画で、『エリザベス』の続編。

¹⁰ C. J. サンソム（越前敏弥訳）『チューダー王朝弁護士シャードレイク』集英社、2012年。

¹¹ 『THE TUDORS ～背徳の王冠～（原題：The Tudors）』。2007年から2010年まで、イギリス、アメリカ、カナダで放送されたテレビドラマシリーズ。日本でも2009年から特定チャンネルで放送された。

¹² 『ヘンリー八世の私生活（原題：The Private Life of Henry VIII）』1933年公開の映画。

¹³ 『わが命つきるとも（原題：A Man for All seasons）』1966年公開の映画。

と、こちらもだんだん勘がはたらいてきて、自分を姿見に映して見る、というシーンを描こうとしたときに、鏡のあるなしを聞いた方がいいと思ったことがありました。実際に聞くと、そんなに大きな鏡はないと言われ、調整したこともあります。

O：質問は、ネームの欄外に、こざきさんが「鏡ありますか？」「この時の犬の種類はなんですか？」など手書きで書いています。それを指先生が拾って、画像や文章と一緒に返してくれる形です。

Q：宗教改革の描き方と、指先生の専門の関係について教えてください。

N：イングランドの宗教改革は、信仰よりも体制優先で進んで行ったり、完全にプロテスタントになるというわけでもなかったりと、大陸との違いがあり、微妙な立ち位置にいると私は考えています。漫画では、それがわかりやすく描写されていると思いました。指先生のご専門はイングランドの宗教改革ですが、そこに関してコメントなどはされましたか？

S：ネームの段階でかなりきちんと描かれていました。地の説明文に指摘を入れたくらいで、何か指示を出したことはありません。僕が考えている宗教改革のイメージとかなり近い描き方だったので、最初から違和感がありませんでした。

K：私たちが指先生の本で勉強しているからだと思います（笑）。

O：宗教改革はかなり勉強しました。最初は、カトリックとプロテスタントが何なのかも知りませんでした。プロテスタントは一つしかないと思っていましたし、国によって違うことは驚きでした。

K：調べれば調べるほどおもしろいのですが、説明が難しいですね。このおもしろさをわかりやすく伝える方法に苦心しています。

Q：単行本の巻末コラムについて教えてください。

N：コラムの重要性を感じています。第2巻では宗教改革、第3巻ではヘンリの「女好き」というイメージについて、でしたよね。特に後者では、ただ女好きだけだったら、王妃にする必要はないということを書いていました。第3巻では、本編でも、ヘンリの、父と兄に対するコンプレックスがはっきりと描かれていました。これまでの巻では、暴虐な王というステレオタイプ的な描かれ方が多かったのですが、ここに来て、そうではない面も描き、巻末でも補足があるなど、1巻の中で、多面的に、深くヘンリを描いていると思いました。巻末コラムで何を書くか、どこまで書くかはどのように決まっているのでしょうか。

S：基本的には生川さんが決めています。ネタバレにならないように気を付けなければならないし、漫画本編の補足以上に出しゃばってはならないのが難しいところです。

O：一側面にならないようにキャラクターを描写したくても、物語を進めていくためには描けないことや、どうしても省略しなければならないことがあります。そういったところを、指先生に補足してもらうことで、読者の方が、作品を読むうえで、新しい視点を獲得できるようにと考えています。コラムの内容は、その巻で出てきたポイントに関して、補足がある

とより作品を楽しめる、または、誤解を生みかねない部分の補足などで、この巻でしか扱えなさそうなものを、テーマとしてリクエストしています。第3巻のヘンリの話だと、ヘンリの王妃たちに触れるので、歴史を知らずに読んでくださっている方からすると、ネタバレになってしまいますよね。「ネタバレ注意」という表記を入れて対応したりしつつ、最終調整しています。本編と合わせて読むとより楽しくなるように、と考えています。

Q：指先生は、どのような史資料を準備しましたか？

S：お話を作るのはごさき先生で、私の役割はピンポイントな質問に答えることなので、こういう史料があるから、こういう話にしてくれというわけではありません。一つ見せたい資料があります¹⁴。これは、歴史家としても気づきになったのですが、ロンドンをテムズ川の川下から見たらどう見えるか、という質問が来ました。作品の中で、グリニッジの宮殿から、セシルとクロムウェルがロンドンへ向かう場面で使うとのことでした。ロンドンと言うと、ロンドン橋の南、サザークから見た景色しか考えたことがなかったんです。これまでの絵画もほとんどみんなその視点で描かれていますし、新鮮な視点でした。「視点が変わるともの見え方が違う」と普段からよく言っていますが、盲点でした（笑）。実際、テムズ川を川下から見た同時代の図はないので、自分でこれを作りました。実際の作品の一コマは、新しい歴史資料として使えるのではないかと思います。片側が砂浜になっているところや、ロンドン橋より上流には帆船がないところなど、かなり正確だと思います。いわゆる歴史史料とは違いますし、悪く言うと歴史を作っていることになるかもしれないですが、いろいろな情報、史料をつきあわせ、テューダー朝時代のロンドンの平面地図を、三次元に起こして描きました。

K：建物や土地の位置関係はよく聞いています。ロンドンからハットフィールドまでは馬でどのくらいか、とか。

S：このテムズ川の時にも、グリニッジからロンドンまでどのくらいかかったのかという質問がありました。実際には作品にはその情報は出ないのですが、私自身考えたことがありませんでした。よくよく考えると、クロムウェルはロンドンに邸宅があったので、グリニッジまで通勤していたはずなんですよね。

K：何かの知らせを聞いて、どのくらいの時間で駆け付けられるのかで話が変わってくるので、物理的な距離が重要になります。

Q：指先生のコメントのさじ加減について教えてください。

S：専門家が見て、これはあり得ないだろうというところは、リアリティに関わるので指摘します。そこに確実にいなかったとか、死んでいたとか、可能性がゼロのことです。逆に、ウィリアムのケンブリッジ入学年は、入学証書や卒業証書があれば別ですが、ないので、可

¹⁴ 指氏自身が作成した、テムズ川の川下から見たロンドンの景色のスケッチを画面共有。ぜひ動画を参照していただきたい。

能性としてあるのならば、屁理屈でも説明がつけば、いわゆる定説と異なってもいいと思っています。

O：私たちは、自分たちは素人だという認識のもと、好き勝手に描いているので、指先生がOKと言ったら大丈夫だろうと肝を据えられます。指先生より詳しい人は、日本にそうそういませんからね。

K：何か言われたら、指先生を出します（笑）。

S：本誌連載の最初のページに、監修として名前が大きく出ていて、責任を覚悟しました（笑）。

O：おかげさまで、のびのびと、安心して描いています（笑）。

3. おわりに

Q：読者、研究者仲間の反応について教えてください。また、過去を再構成することや歴史との向き合い方をどう考えていますか？

K：前の連載とあまりにも違うので、みんな驚いていました。読んでくれるのかという不安もありましたが、私自身はとても楽しく描いています。描いていること自体は人の生き方なので、前作とかけ離れているわけではないと思っています。過去を再構成することについては、自分は研究者ではないので、個人的な感情を大いに込めて、妄想を爆発させて描けるのが、漫画の強みだと思っています。私の考えたテューダー一朝を見てくれ！という気持ちです。

O：歴史に詳しい方から見てどう見えるのかは心配していましたが、新田さんのような方が素直に喜んでくださっているのが、とても安心しています。歴史を好きな方が歓迎してくださっているのは、すごく励みになります。逆に、再構成することについては、歴史をまったく知らなくても楽しめるように、という点は気を付けています。歴史ものは、どうしても歴史的な出来事が優先的になり、キャラクターの感情や、なぜ今そのように考えているのか、という点を掘り下げない作品もあります。『セシルの女王』は、そういった点を大切に作っています。その感情さえわかってもらえたら、歴史の細かいことや、カトリック、プロテスタントといったことがわからなくても、楽しめるものにしたいです。歴史を知らない、興味がない人にこそ、読んでほしいと思います。『あさひなぐ』は、なぎなたに取り組む女子高生たちがなぜ戦うのか、を考えていました。今回は、ウィリアムがなぜ、どう生きるのか、が問題です。立ち向かっている課題や時代が違うだけで、一人一人の感情やあり方は共通していますし、そういうところをこざきさんは魅力的に描ける作家さんだと思っています。

S：近世、テューダー史やっている人も違和感なく読んでいます。細かい描写は皆さん感心しています。衣服の仕立て具合まできちんと描かれていると感動している方もいました。過去を再構成することに関しては、歴史家には重い質問ですが、監修する以前から、歴史とフィクションの関係に関心があったので、常に考えていました。今まで歴史家は、自分たちは事実を扱っていて、文学や小説は物語を扱っているとして峻別する意見が多く、論争もありました。しかし、考えてみれば、先行研究も一種の物語ではないでしょうか。実際、史料を一から毎回読むわけではなく、先行研究という積み上げた物語の上に乗っかってい

る部分がありますよね。歴史家は客観視できているという、一種の幻想に陥っているのではないかという気もします。実際、歴史は事実だけで動くわけではありません。物語で動いているところもたくさんあります。政治家などは、物語を信じて、世を動かす場合もあります。そのようなことを思うと、事実とフィクションを峻別できるのか、峻別することによってどのような意味があるのか、を考えていくヒントになるのではと思います。歴史家にとって厳しい言い方になると、事実はそのままで特権をもっているのか、というところまで一度考えてみないと、歴史家が世間から放り出されたり、取り残されたりしてしまうのではないかと考えています。このようなことをつらつら考えながら、でも楽しんでやっています。

質疑応答：事前質問

Q：他に好きな歴史漫画はありますか？

S：意外と読んでいないですね。『ベルサイユのばら』も読んでいません¹⁵。

K：『ベルサイユのばら』、『へうげもの』は好きです¹⁶。

O：私も『ベルサイユのばら』、『へうげもの』は好きです。『へうげもの』では、『セシルの女王』の第3巻の表紙になっていて、本編にも出てくる、ヘンリ8世の兜も登場しますね。

Q：『セシルの女王』の世界に転生するなら誰がいいですか？

全員：絶対に生まれ変わりがたくないです（笑）。

S：ウィリアムが一番安全ですかね。

K：私がウィリアムになったら、うかつなことをして死ぬと思います（笑）。

S：ウィリアムは能力があったから、メアリ時代にもその能力を買われて生き残っていますし、戦争に行っていないのもポイントですね。

N：アン・オブ・クレーフェはどうですか？

全員：確かに！

O：私も思っていました。一番余生が穏やかですよ。

S：一番のんきに過ごせるかもしれない（笑）。

O：満場一致ですね（笑）。

Q：お気に入りのキャラクター、エピソードを教えてください。

K：ずっと言っていますが、ジョージ・ブーリンです。死に際が輝いていました。リチャード・リッチも気に入っていて、ところどころで出したくなります。

S：リッチも危ない目に遭わず、子孫も繁栄していますね。

¹⁵ 池田理代子『ベルサイユのばら』。集英社『週刊マーガレット』にて、1972～1973年まで連載された漫画。本編全10巻。実写映画化や舞台化、アニメ化も行われた作品。

¹⁶ 山田芳裕『へうげもの』講談社『モーニング』にて、2005～2017年まで連載された漫画。全25巻。アニメ化された。

K：やったことは嫌われるはずなのに、出世しているのに、憎めない人だったのかなと思います。

O：ジェーン・シーモアです。あんなにいいキャラになるとは思っていませんでした。

N：ジェーンの意味がはっきりと感じられる描き方で、新しいですね。

K：ヘンリ 8 世と 6 人の妻、とおとぎ話のような括られ方をしますが、6 人全員の人格と生き様を描こうと気合を入れていました。

S：これから活躍するであろう、ピーター・レンです。あそこで終わるはずがないと思っています。

O：新田さんは誰が好きですか？

N：リッチが衝撃的でした。後世のあまり良くないイメージに対して、かわいらしく、ぷくぷくした姿で出て来たのに驚きました（笑）。また、自分の研究の関係で、エドワード・シーモアに思い入れがあります。肖像画そっくりで嬉しかったです。

Q：歴史研究と歴史ものの作品の違いについて教えてください。研究の場合は、その時代や大きな流れに当時の人々を位置付けて考えると思いますが、作品の場合は、人を設定して、その人を中心に物語が進んでいきます。この違いは、監修の立場からはどう見えますか？

S：歴史家の立場で書くと、すべて地の説明文になりますが、作品は会話文で進めなければならない、というメディアの違いだと考えています。しかし考えてみると、古代に書かれたような、一人称の歴史に近いのかなと思います。視点が増え、客観的に見るように努めるのが、近代の歴史学ですね。座談会の最後でも言いましたが、客観視が歴史家の特権、物語やフィクションを下のものとしてとらえてしまうと、歴史家の思い上がりになってしまうのではないかと思います。

Q：キャラクターデザインについて教えてください。

N：エリザベスの赤ちゃんのデザインが、「ぶちやかわ」で良いとコメントが来ています。一方、即位したときは、きりっとしていかっこいいとも。エリザベスは美化されて描かれることも多いように感じますが、このようなデザインにしたのはなぜですか？

K：エリザベスは、私の好みです。大人になったエリザベスは、資料集などから受けた、きりっとした女性というイメージをそのまま描きました。赤ちゃん時代に関しては、第 1 巻の最後、生まれたてのエリザベスが出てくるころまでは、普通の赤ちゃんだったんです。第 2 巻の冒頭に出てくるシーンで、今一つインパクトがないと思い、すごい目つきの赤ちゃんということにしました（笑）。

Q：ヘンリ、クロムウェル、シーモアなどは肖像画に似ていますが、セシルやアスカム、チークはいわゆる漫画の男の子になっています。セシルも成長すると肖像画になりますか？

K：おじさんは割と似せていますね。セシルは今後肖像画にはならないと思います。セシル

は太っていたという記述もありますが、漫画的には太らせるのは難しいですし、読者のにも悲しいと思います。

Q：西暦何年まで描く予定ですか？ぜひ 1603 年まで描いてほしいです¹⁷。

O：できる限り長く描きたいです。ラストはまだ明確には決めていません。

K：調べれば調べるほど描きたいことが増えますが、少しずつ編んでいっているところです。とりあえず、エリザベスの即位を目指しています。即位にたどり着いた時には、さらに描きたいことがあるかもしれませんが。

Q：宣伝するときのアピールポイントは？

O：最初は歴史もの、テューダー朝に関心がある方に届けば、と池田理代子先生（『ベルサイユのばら』の作者）に帯コメントを頂きました。とはいえ、あらゆる方に読んでいただきたいので、どうやって広げて行ったらいいか、みなさんからアイデアが欲しいです（笑）。私の Twitter アカウントに送ってくれてもいいですし、今回のような企画もありがたいので、このような機会があれば、いつでもお声がけください！

質疑応答：リアルタイム

Q：ヘンリが暴君であったというイメージは、近年覆されているように思いますが、作中でかなり暴力的に描かれているように思います。何か意図があるのですか？アン・ブーリンに思いを寄せるウィリアムから見たヘンリ、ということでしょうか？

O：まだ単行本になっていませんが、第 4 巻に収録される部分を見てもらうと、ただの暴君ではないヘンリの側面が見えてきます。最初のころは、子供のウィリアムから見たヘンリですが、話が進むにつれ、それだけではない側面も出てきます。ぜひ見てほしいです。

Q：アンとジェーンの関係性はどのような着想があったのですか？

K：完全に私の好みです。シスターフッドが大好きで、女は寄り集まれば連帯するものだと思うています。妻たちの、これからの連帯も描いていきたいです。

Q：セシルの女王がハリウッドで映画化されるなら、希望の俳優はいますか？

N：エリザベスはケイト・ブランシェットのイメージが強いですね。

S：セシルは、トム・ハンクスはどうですか。振り回されながら頑張る、というイメージがあります。若いころはトム・ハンクスの息子ができるかもしれませんね。エリザベスは、昔ならキャサリン・ヘップバーンが似合ったと思います。

N：映画や宝塚に向いていると思います。宝塚だと、ヘンリ役の人が大変そうですが（笑）。

¹⁷ エリザベスが崩御した年。

S：若いころのルネサンス君主としてなら、イケメンでも大丈夫ですよ。

Q：海外展開は考えていますか？

O：フランス版のオファーはすでに頂いています。まだいつ出るかは決まっていません。タイも出る予定で、タイでは電子版も出ます。現地の出版社から、小学館の海外事業部にお話を頂いて、作家さんに許諾を得て、そこから翻訳作業が始まります。英語圏は、漫画を読む文化が、フランスやドイツなど、他のヨーロッパ諸国に比べると根付いていないようで、難しい部分があります。少しずつ広まって、翻訳される国が増えると良いと思います。

K：指先生や新田さんがイギリスに行ったときに、道端に落としてきてほしいです（笑）。

S：翻訳をつけておきます（笑）

N：ヘンリ 8 世は見ればわかるので、テューダー朝の話だということは伝わるとおもいます。

Q：イングランドではどの時代が人気ですか？

N：テューダー朝は人気ですよ。エンターテインメントの題材によくなっています。ヴィクトリア朝も人気です。

S：テューダーは昔から歴史ものとして人気ですね。日本で言うなら、頻繁に大河ドラマになっているくらいだと思います。

K：日本ではヴィクトリア朝が人気のイメージです。

S：日本の読者からすると、テューダー朝は異世界で、ヴィクトリア朝は今と地続きのような感じがするのではないのでしょうか。イギリスの人にとっても、テューダー朝は遠い過去で、当時の人々の考えていることはよくわからない、という感じかもしれないですね。

おわりに

Q：セシルの女王の今後について、みどころ、注目ポイントをお願いします。

K：その時代を生きていた歴史上の人物に、血肉を通わせたいと思います。生き様を見てほしいです。描いていると、意識はしていないのですが、現代的な問題に通じるテーマ（女性蔑視など）もあるので、そこも見てほしいと思います。歴史の漫画ですが、実際に生きていた人間の話でもある、というところですよ。

O：単行本第 4 巻が 5 月末発売予定です。第 3 巻のラストが、アンの運命がどうなるか、という場面でした。その続きの 24 話がすごいことになっていて、第 4 巻の最後に入る 31 話もすごいことになっています（笑）。31 話は、指先生をして、神回と言わしめました。

S：31 話は涙なしでは読めません。乞うご期待です。

（単行本第 1 巻：B6 判 192 頁 2022 年 小学館 税別 650 円）

（単行本第 2 巻：B6 判 208 頁 2022 年 小学館 税別 650 円）

（単行本第 3 巻：B6 判 224 頁 2022 年 小学館 税別 650 円）

（京都大学大学院博士後期課程／日本学術振興会特別研究員 DC）